

アメリカ格差社会をとらえた ジャック・ロンドンの『マーティン・イーデン』

内 野 信 幸

言葉の内実

バブル経済が崩壊して我国でも「格差」という言葉があふれている。その言葉が冠せられた雑誌や書籍も数多く出版されている。「教育格差」、「医療格差」あるいは「生活格差」など、何か新しい実態をあらわすのかと思わされるのだが、この言葉の内実は「貧富の差」から生み出される様々な現実の姿だと言える。

格差という言葉は使ってはいないが、19世紀後半から20世紀前半にかけて経済恐慌を経たアメリカ合州国の現実社会を背景にした小説は、この貧富の格差社会で生きる人間の姿を具体的に表している。『野生の呼び声』（1903年）や『ホワイトファング（白牙）』（1906年）といった動物を主人公にした小説が邦訳されて、我が国でも馴染みのカリフォルニア生まれのアメリカ人作家、ジャック・ロンドン（1876～1916）もそうした作家の一人だ。ロンドンは動物を登場させた小説ばかりを書いていたわけではなく、貧富の格差が生みだされたアメリカ社会を背景にした小説も多数書いている。拙稿で取り上げる『マーティン・イーデン』（1909年）は、まさに貧富の差を背景に、ブルジュア社会に入るために、そこへの階段をなんとか登ろうとするマーティンの苦闘と彼の自殺という結末までが丁寧につづられていく。

話し方やキスまでも

マーティンは20代そこそこの船乗りで、フェリーボート上で酔っぱらった不良たちに、ブルジュア家庭のアーサーがからまれてところをマーティンが救う。その時のお礼にと、アーサーの邸宅に招待される。そこで出会うのが、アーサーの姉ルースだ。ルースは

蒼白い、この世のものとは思えない美しい女性で、目は大きく崇高で青く、髪は金髪であった。彼女がどんなふうに衣装を着けていたかはわからなかった。ただ、その衣装が彼女自身

に劣らぬぐらいすてきなものだということはわかった。彼女を、細い茎についたうすい金色の花になぞらえてみた。いや、そうじゃない。精霊，神，女神だ。これほど純化された美なんて，この世のものじゃない。(4)⁽¹⁾

と，マーティンはすっかり彼女の虜になってしまう。外面だけではなく，その素晴らしい知識に感嘆し，その顔の蒼白い美しさにみとれる。彼女の「知性」にも囚われてしまう。彼女は彼のことを「イーデンさん」とさん付けで名前を呼ぶ。また，「彼女が母親とキスを交して，二人で腕をからみあわせて」(14) 彼のほうにやって来たときにも「親と子がこんなふうに愛情をみせあうなんて考えられない。上流社会でこそ得られる生活の極みだ」(同) と感じ入ってしまう。

ルースとの出会いと彼女の生活世界を垣間見たことは，「彼に道徳的な革命を引き起こす」(47)。自分も清潔にしなければと，歯みがきとつめ磨きをするようになるし，「毎朝冷水浴」をするようになり，「労働者階級のはいているズボンのだぶついた膝と，労働者階級以上の人たちのはいている膝から足までのぴちっとまっすぐな線との違い」(48) に気付き，ズボンにアイロンをかけるようにもなる。さらに酒には強かったが，断酒も実行する。こうした涙ぐましい光景は6章の前半部に述べられているが，こうした彼の行動のなかに，ルースの属するブルジュア社会に入るようとするマーティンの上昇志向の決意が示されている。

マーティンのブルジュアの社会に向かっていく上昇志向は，ジャック・ロンドン自身のブルジュア階級の女性メイベル・アプルガースとの交際のなかで示された徳目が用いられていると Clarice Stasz は *American Dreamers ---Charmian and Jack London* (toExcel, 1999, p. 57)⁽²⁾ のなかで指摘して，以下のような二つの項目が示されている。前者がブルジュア階級として獲得すべき徳であり，後者が若いころのロンドンの性癖だ。

上品 / 下品， しらふ / 酔いどれ， 品行方正な女性との交際 / 不品行な女性との交際，
性的な慎み深さ / 奔放な性衝動， 敏感さ / 粗野， 仲間意識 / 孤独， 充足感 / 飢餓感

マーティンもルースと出会った時から，前者のようなものを身につけようと必死に努力をしていくことになる。だが，そうすることは「労働者階級の地位を脅かす」(43) ことになるとは彼も感じ，苦しんではいらぬ。

だが，エチケットやマナーだけではなく，マーティンが身につけていかなければならないのは知識と教養であることは，ルースと出会った時から彼に感じ取られている。詩人スウィンバーンを「スウィンバーン」と言ってしまった時に，それを彼女に訂正されるが，彼女の持つ教養にも憧れて，読書をしなければと決意して，パークレイにある無料図書館に通い始める。

マーティンの知への旅立ちとルースの思惑

その後、マーティンは図書館で『ギリシャ・ローマ神話』、そして「むさぶるように詩を読む」。水夫として体力には自信のある彼は、睡眠時間も削って学習を深夜、早朝まで続けていく。ルースの方も「彼女の内に潜む母性的なもの」(58) からか、彼をなんとか助けたいと強く感じるようになっていく。彼に求められると、英語の文法や語法、また俗語表現にも注意するようにと助言する。マーティンの方も文法書を読破し、ことばのつながりだけではなく、詩の韻律や構造にも興味を持って学んでいく。彼の学力は急速に伸びていく。

そうになると、ルースは彼の生活を改造してやろうという気持ちが強くなる。チャールズ・パトラー氏の生き方をマーティンに学んでもらおうと、氏の人生の歩みを話す。パトラー氏は、

昼間は働き、夜は夜学にお通いになりました。あの方の目は、いつだって未来にしかむいていませんでした。そのうち、夜間の高校に行かれました。わずか十七歳で、活字を組む仕事ではすばらしい賃金をおもらいになりました。でも、それに安住しないで、もっと高い望みをお持ちでした。(中略) 究極の目的のために、もう一度身近な犠牲をはらうことで満足なされたのです。法律をなさる決心をし、給仕として私の父の事務所にお入りになりました——いかなものでしょう——週わずか四ドルだったのですよ。でも儉約の仕方を心得ておいででしたから、その四ドルの中から、貯金をお続けになったのです。(71)

と、成功物語の主人公のような生き方をして、今や三万ドルの高給を手に行っていると話す。ところが、マーティンは「偉い人だ」(74) とは言うが、彼の「美的感覚や人生観に障るものがあるように思われた。」(同)

一方、ルースは、「衝撃を受け、いっそうマーティンを改造する必要があると確信した。彼女の考え方はあのありふれた考え方、つまり、自分たちの皮膚の色、信条、政治が最上かつ正しいものであり、世界に散在する他の人種の地位は自分たちより劣っているということを人類に信じこませようとする考え方であった。(中略) なんとか自分の特別な生活に住みついている人たちと同じように形作ってみたいと願」(同) うようになる。(同)

だが、二人の違いは実は出会ったその日に、すでに述べたスウィンバーンについても示されていた。

異なる文学観

初めて知ったスウィンバーンに胸を躍らせていたマーティンだったが、ルースは「スウィンバーンはだめだってことすわ。だってあの人には、そうね、品のよさというものがありませんもの。

よむべきでないような詩もたくさんありますよ。真の偉大な詩人の詩というものには、一行たりとも美しい真実をふくんでいないものはありませんし、それらは人間の高尚で、気高いものすべてを呼び起こすものなのです。」(10) と語る。

ところが、彼の方は「俺の読んだのは、すごくよかった。ちょうど太陽が探照灯みたいに、パーツと輝いちゃって俺の内側まで明るくしてくれたんす。そんなふうにその詩はとりついちゃたんすけど」(同) とスウィンバーンの詩の魅力をとらえている。

文学は 品の良さ 美しい真実 読者の高尚で、気高いもの を呼び起こすものでなければならない、という狭量な文学観では、その後マーティンが書き上げた小説を理解し、評価することができないのは、当然だろう。この文学観の違いは、生き方の階級格差から生じていることは、明らかだ。

自学自習を進めるマーティン

マーティンは生活費を稼ぐために、宝探しのための船に 8 カ月間乗り込み、給料を手にしてサンフランシスコに戻る。もちろん船の中でも読書を続け、同じ水夫たちの文法の誤りに神経をとがらせて文法に対する鋭敏な感性に磨きをかける。さらに、南海の美の断片をルースにも書いてあげようと思ひ、「内にあった創造的精神が燃え上がり、ルースだけでなく、もっと多くの聴衆のために、この美を造りなおしてやろうという気に駆られた。さらに、後光を受けて、すばらしい考えが浮かんだ。そうだ、ものを書くんだ！」(77) 彼は、睡眠時間を 5 時間にして、宝探しの航海のことを書いて新聞社に送る。また、少年少女向けの『若者の友』にも冒険物語を送りつける。だが、どれも掲載はされない。それでもなお、「真珠採取」の記事を、そして「人生の美酒」という短編を書き上げ、ルースに読み聞かせる。彼は、「人生から大きなものをとらえて、この物語(「人生の美酒」)にまとめようとしたのだが、彼女の方は、ごく小さな欠点を指摘したに過ぎなかった。

彼女は内心では、「素人くさい」(123) と判断していた。もうひとつの「酒壺」に対して「まあなんてすごいお話なんだこと！」と言ひ、さらに「ああ！下品だわ！きれいじゃないわ！すごく汚いわ！」(124) と彼が思いもよらぬ言葉を投げてくる。マーティンは「彼女に理解できないのは、彼女の責任ではないのだ。彼は彼女がこのようにあどけなく生まれつき、庇護されてきたことを神に感謝した。けれども、彼は、人生には軟泥がはびこっているにもかかわらず美しさや偉大さがあるのももちろん、不潔さがあることも知っており、何としてもそれを世間に述べつたえようとしているわけなのだ。」(同)

彼は彼女への愛ゆえに、その酷評を許すのだが、ルースの方は彼がものを書きたいという願望などは、そのうち捨て去り、真面目な仕事に就くとたかをくくっている。二人の間にはあきらかに溝が広がっていつているにもかかわらず、あいかわらず彼女の方は「克己、犠牲、辛抱、勤勉、大いなる努力といった大義を、彼女は間接的に説いた——彼女の心の中では、父親やバトラー

氏や、アンドルー・カーネギーのような貧しい移民の子から身を起こし、世界的な図書の寄贈者になった人物によって、対象化されている」(162-163)。そのような「知的な面では、彼女と対等の関係にあったわけだ。しかし、意見の合致しない点があるからといって、それが愛情に影響することはマーティンにはなかった」。(163)しかし、愛ゆえにルースの本質を見極められぬマーティンに警告を発する人間がいる。ラス・プリセンデンがその人だ。

ブルジュア思想と対峙する思想の持ち主

プリセンデンは理由不明であったがルースの父親の開く晩餐会に呼ばれたが、早々にモース家を出ていく。途中でマーティンが追いつき、何丁か一緒に歩く。すると、突然プリセンデンは「うぬぼれの強い馬鹿めが！」(278)と言い出す。二人は、酒場で酒を酌み交わし、話を続けていく。その時マーティンはプリセンデンに「コールドウェル教授にないもの——すなわち、情熱や洞察力と知覚力のひらめき、熱烈で制御し難い天才といったものがあることに気づいた。生きた言葉が彼から流れ出てきた。」(279)二人の間で知的刺激に満ちた付き合いが始まる。もちろんマーティンの小説にも誰よりも強い関心をもって読んでくれる。さらに、マーティンが作品を市場に出そうとしていると言うと、「雑誌なんて放っておけばいいんだ。(中略)雑誌界の要求に応じて美を売ろうと毎日浪費するなんて、自滅だぜ。(中略)君だってもっとも短命なる者なんだから、名声を得てどうしよっていうんだ？そんなもの、きみには毒になるよ。(中略)一行だって雑誌に売ってほしくないね。美が、仕える唯一の主人公なんだ。美に仕えりゃ、その他もろもろは糞くらえだ！成功だって！……」(286)と、文学の市場主義を激しく非難する。

さらに、ルースとの交際についても「いったいブルジュアの娘なんかどうするつもりだ？ブルジュアなんか放っておけよ。生や死を物ともせず、できる限り人を愛する、そんな誰かすごく奔放な、炎のような女を選ぶんだね」(287)と忠告する。さらに、ルースのような「そんな女は、マーティン、君を愛しはするだろうが、それ以上にあのつまらん道德のほうが大事なんだろう。君の求めている、すばらしく奔放な生活やとても自由な魂や輝く蝶であって、ちっぽけな陰気な蛾じゃないんだろう。ああいう連中にも飽きるさ。だけど君は生きようとしなない。船と海にももどろうとはしない。だから、こんな都会の汚い所をうろつきまわって、ついには骨が腐って、死んじゃうのさ」(288)。プリセンデンの忠告は的を射ているが、それをマーティンが納得するまでには今少し待たねばならない。

また、彼はマーティンをマーケット通りの南側の労働者街でおこなわれている読書会に連れ出す。その会で目にしたのは、「意見の衝突はしばしばあるにせよ、浅薄ではない。何の話しをするにしても、各人が知識を互いに関連づけて用いているし、社会と宇宙についての根深い統一が概念を持っている、とすぐわかった。誰も自分のために意見をでっちあげたりはしない。彼らは皆さまざまな反逆者だが、平凡な決まり文句など使わない。マーティンは、これまでモース家で、こんな広範囲にわたる話題が議論されるのを聞いたためしはなかった。」(312)ここに集まる人

たちは、料理人と給仕のストを組織した者やオーストラリア人の統計にもっとも強い者など、最下層のひとびとたちなのだが、彼らの知識はじぶんのものとして語っているところが、モース家に集まる似非知識人たちとは大いに異なるということをマーティンは実感する。

かつて、モース氏と邸宅を訪れた地元の高等裁判所の判事プラント氏と堂々と議論をする中で、マーティンは自らを「反動主義者」(322)であり、「個人主義者」(同)であり、「ニーチェは正しい」(同)と評価する人間だと公言した。そして、競争の制度と強者の生存を是認できるとし、その一方で強者からも力を奪おうとする判事の行為を徹底的に批判する。

モース氏は「娘婿になる男が怠け者で、まじめでちゃんとした仕事をする気にならないのが気に入らなかった」(324)。こうした様子を目にしたルースは、マーティンが判事を侮辱したと断言して、それは礼節に欠ける行為だと非難する。モース家にやってくる「立派な人」たちは、自分を不愉快に感じるし、マーティンにとっても同じように不愉快だから、彼は「もう食事にはお邪魔しないことにする」(326)と、彼女に言いきる。

熱気に満ちた議論

ブリセンデンは、労働組合の会合にマーティンを連れて行く前に、自分が社会主義者になった理由を「社会主義は避けられないものだし、現在の腐敗した非合理的なやり方では持ちこたえられないし、君の言う馬上の人物の時代はもう過ぎてしまったからなんだ。奴隷たちはもうだまっではいやしないんだよ。数が多いからいや応なしに、自称馬上の人とやらは、馬に乗る前に引きずり倒されちゃうさ。きみも連中から逃れられなくて、奴隷の倫理をすっかり鷄呑みにさせられちゃうよ。君のニーチェ思想は時代遅れだ。過去は過去であって、歴史はくり返すなんて言うやつは嘘つきさ。むろん、僕だって大衆はいやだけど、貧乏人に何ができるんだい？馬の上の人は現われないんだから、今の臆病な支配者の豚どもにくらべりゃ、どんなものだってまだいいさ。」(327-328)

実際、支部の会合では、組合員たちはマーティンを「知識人にふさわしい敵として彼を認め」、その意見に「一言洩らすまいと熱心に耳をかたむけてくれる」(329)。彼はこう意見表明をする。

「商人や金貸し連中」が支配する社会であっては、「蜘蛛のような陰謀や甘言、おべっか、協議を手口として(中略)みなさんの仲間の判事を買収し、みなさんの議事を墮落させ、奴隷少年少女たちを売買奴隷制度以上におそろしいものに押しつけてきました。二百万人もの子供たちが、今日、この合衆国という商人による少数独裁政治のもとで働いています。一千万人ものみなさん方奴隷が、十分な家と食べ物を得ていないのです。しかし、(中略)奴隷国家は存続不可能であります。そのような社会は、性格上進化の法則を廃棄せねばならないからです。奴隷社会ができれば、すぐに荒廃が始まります。進化の法則をなくすと口で言うのは易しいことですが、みなさんの力を維持してくれる新しい進化の法則はどこにあるので

しょう？きちんとご説明願います。」(330)

このスピーチは「やんやの大騒ぎ」で受け入れられて、熱気に満ちた反論も起こる。だが、それは「知的な激しさであり、思想の戦い」(同)であった。このスピーチはアメリカの現実をしっかりと見据えて、幼年労働や単なる賃金奴隷、さらにホームレスや飢餓の問題に解決を迫る内容だ。

この主張からは、ニーチェ的な思想も、垣間見ることにはできない。

作家としての成功と虚偽に満ちた世界への絶望

この集会に参加して、好評を博した様子が新米記者によって記事に掲載される。その記事中ではマーティンは「オークランドの社会主義者のもっとも悪名高い指導者」(332)として扱われてしまう。その結果、つけのきいたポルトガル人の食料品店でも、つけで買うことを断られるし、弟と歩くルースの姿を偶然目にするが、二人は彼を無視しようとし、弟ノーマンは「姉に近づいたら警察を呼ぶ」(340)と脅す。彼女も「あなた自分の言っていることがわかっていないわ。私は下品じゃないのよ」(341)と、彼女のブルジュア価値観を全面に押し出してマーティンを拒絶する。

また、プリセンデンは突然、拳銃自殺をしてこの世を去る。原因不明だが、生きることに絶望したとしか推測できない。もはや、マーティンには友人もいなくなり、家族も支えてはくれない。そんな時に、皮肉なことに彼の作品が売れ出す。彼の書いたものが次々に出版され、ルースには「下品だ」と烙印を押された作品も出版され、さらに作品が海外でも翻訳出版されるようになる。彼は、売れっ子作家になり、名声もうなぎ昇りになる。多額の原稿料、印税を手にして、金銭的な成功者の仲間入りをする。

すると、かつてマーティンをこっぴどくやっつけたブランド判事も、初めて晚餐に招待をしてくる。今まで掲載を拒否してきた雑誌社もこぞって彼の作品を買い上げてくれる。また、内々に婚約を破棄したモース氏本人からも晚餐に正式に招待をされる。さらに、昔、放校処分をした教育長もマーティンの『鐘の響き』をパウを彷彿とさせるなどとお世辞を言い、夕食に招待したいと誘う。マーティンは一人通りを歩きながら、「ああいやだぜ！あの先生俺がおっかなかったんだ」(384)と、一人つぶやく。

さらに、ルースも「一人で」ホテルに滞在しているマーティンのもとに、成功者になった彼とよりを戻そうとやってくる。彼女は、

「私はあなたに明らかにしてみせますわ。わたしの愛が成長して、私の階級や、わたしの一番大切なものよりも大きくなっていることを証明してみせますわ。ブルジュアの一番大切なものなんか、侮辱しますわ。もう世間なんてこわくありません。父や母のもとを去って、

友だちにも物笑いになっても構いません。あなたさえよければ、今すぐにもあなたのもとに転がりこんで、あなたと一緒にいることを光栄で、よかったと思いますわ。これまでが愛への裏切り者だったとしたら、これからは愛のために、今までの愛の裏切り者になります」彼女は、目を輝かせながら彼の前に立っていた。(390)

こういうルースの告白を聞きながらも、マーティンは「自分の愛したのは、理想化されたルースであり、自分の愛の詩に出てくる明るい妖精だったのだ。ブルジュアのあらゆる欠点を持ち、頭の中にはブルジュア心理に絶望的に縛られた現実のルースなど、愛したことはなかったのだ。」(395)そして、今「とうとうブルジュアの因習の鉄の支配を乗り越えた真の女性として立ち上がったのだ」(396)とは思えるが、もはやそれには「感激も感動もしない」マーティンになっていた。しかも、「一人で会いに来た」と彼女は言っていたのだが、通りの方では物陰に身を隠す弟ノーマンの姿をマーティンはとらえている。最後まで嘘をついて場をつくらうとする彼女の姿を見て、「彼女は嘘つきだ!」、「ブルジュアめが!俺が無一文の時には、彼女と一緒に人前には出られなかったくせに、預金ができると、彼女を俺の所へ連れてきやがるんだから」(397)。マーティンはかつて憧れたブルジュア階級の人間の愚かさや浅薄さに、もはやうんざりしてしまっている。さらに、生きる意欲をも喪失してしまった。

残された道

マーティンはもはや「生きたいとは思わない生命」(403)となり、「まっすぐ死に向かっていく」(同)く。タヒチに向かう観光船の水夫部屋に行っても、

これらの無感動な連中には、どうも親近感が持てなかった。もうお手上げだった。上のほうでは誰もマーティン自身には用はなく、かと言って、過去の自分を必要とした同じ階級の連中の所へ戻って行くこともできない。水夫連中などにはもう用がない。あの愚かな一等船客や騒々しい若者同様、彼らにも我慢がならなかった。(407)

自己を位置づける場所も仲間もない。彼は、スウィンバーン詩の一節をゆっくり朗読してから、その詩の一句、「死者の蘇生のためしなし!」に感銘を受けながら、熱帯無風の日に、海に身を投じる。その死は美しくつづられている。

さまざまな色や光が彼を取り巻き、洗い、そして体に浸透していった。あれは何だろう? 灯台のようだ。が、それは彼の頭の中にあるもの——白く輝く閃光であった。そのひらめきは、どんどん速くなった。(中略) 暗闇の中へ落ちてしまった。そう思うや、あとは何もわからなくなった。(411)

このように主人公の死を美的に描いているからと言って、ロンドンが社会に失望した読者に自殺をすすめているわけではない。さらに、ニーチェ的な個人主義を喧伝しているようには考えられない。リズィーの自己実現への支援やジョウに対して幼年労働を禁じるようにという強い要求が述べられている点、さらに、労働者たちに行った演説の内容からもそれは明らかだ。成功への夢に翻弄されて、自己の存在を無にさせられるのは、貧富の格差社会がはらむ、危機的な要素だと言える。マーティン・イーデンという才能ある若者が、作家としての成功を手にして、金銭と名声というアメリカの的な成功の夢を実現した後に、孤独と空虚しか残されないというアメリカ的悲劇をこの小説は紡ぎだしている⁽³⁾。

注並びに参考文献

- (1) *Martin Eden in The Works Of Jack London* 13巻 大浦暁生、辻井栄滋、ラス・キングマン監修 (本の友社, 1989年)。本文中の()内に示した算用数字は同書からの引用ページを指す。なお引用にあたっては、ジャック・ロンドン・辻井栄滋訳『ジャック・ロンドン自伝的物』(晶文社, 1986年)を使用した。
- (2) Clarice Stasz *American Dreamers* (toExcel, 1999)。
- (3) マーティン同様に、「成功の夢」を追いかけていく青年の物語をアメリカ作家セオドア・ドライサーは、『シスター・キャリー』(1900年)、『アメリカの悲劇』(1925年)に描いた。前者の結末は、女優として成功したキャリー - の姿は空しさがつきまとう。後者の主人公クライドも死を迎えることになる。また、クライドの死は、「恋人の女性ロバータを湖で溺死させた」という容疑で、「第一級殺人罪」で、死刑になるというストーリーだ。「成功の夢」にかかわって、結末は主人公の「死」であるが、その内実は異なる。今後、主人公の死の問題について研究していきたい。また、「ジャック・ロンドンが南海の船旅出た時に、『シスター・キャリー』も読んでいた」という指摘をも見つけた。『マーティン・イーデン』と『シスター・キャリー』との関係も今後探っていこうと考えている。

付記：拙稿は、日本ジャック・ロンドン協会名誉会長 立命館大学教授辻井栄滋教授退職記念論集 のために準備したものだが、時間の都合上間に合わなかった。ここに氏のご退職のお祝いと、翻訳文を引用することに謝意を表したい。なお、引用文中にカタカナでルビがふってある語にルビを付けずに引用したことをお断りして、失礼をお詫びする。